

Z 世代のクリスマス・イメージ Gen Z's Image of Christmas

石井正人
Masato ISHII

1.

2017 年から 22 年の 6 年にわたり、千葉大学国際教養学部において 2 年生を中心とした「ポピュラーカルチャー論」の授業を行った。毎回回収するコメントペーパーやテーマごとの課題、また期末課題レポートなどによって、「ポピュラーカルチャー」に関する Z 世代の意識について、極めて興味深いデータや資料が集まった。少しずつ整理して紹介してきた。

この授業の中で「ポピュラーカルチャーとしてのクリスマス」を扱い、関連して受講学生にクリスマスについてのアンケートを行った。2017 年と 18 年におけるその結果について、本稿で紹介したい。

2.

アンケートは次のようなものであった：

クリスマスと言えば？

まず何を思い出しますか？

どんなもの、どんなことが相応しいですか？

これぞクリスマス、という歌や絵などを紹介して下さい。

これだけでは、「絵」というのがよく分からないかも知れないと危惧したので、別途次の

ような補足の回答用紙を配付した。

20XX年 ポピュラーカルチャー論 (石井)

氏名 ()

学生証番号 ()

<例>

年末は仕事の大掃除
お世話になった社長さんに
心からのプレゼント！



クリスマスには 残業 を！

クリスマスには を！

このような、羽目を外すくらいの形で、クリスマスのイメージを吐露してもらいたかったのである。

3.

まず、クリスマスと言えは思い出す、もしくは、この曲を聴くとクリスマスという気分になる、と言う曲を出してもらった結果である。複数回答可とした結果である。

<2017 年度>

1	All I Want for Christmas Is You	19
2	Last Christmas	15
3	すてきなHoliday	12
4	ジングルベル	9
5	クリスマス・イヴ	8
6	きよしこの夜	7
7	恋人がサンタクロース	5
7	クリスマスソング	5
9	ホワイトクリスマス	4
9	赤鼻のトナカイ	4
9	サンタが町にやってくる	4
9	I wish you a merry Christmas	4

<2018 年度>

1	All I Want for Christmas Is You (マライア・キャリー)	12
1	Last Christmas (Wham)	12
1	クリスマス・イヴ (山下達郎)	12
4	ジングルベル	10
5	すてきなHoliday (竹内まりあ、ケンタ)	5
6	クリスマスソング (バックナンバー)	4
7	きよしこの夜	3
7	赤鼻のトナカイ	3
7	恋人たちのクリスマス	3
7	We wish you a merry Christmas	3
11	サンタが町にやってくる	2
11	Happy Christmas (ジョン・レノン)	2
11	戦場のメリークリスマス	2

マライア・キャリーの“All I Want for Christmas Is You”、Wham の“Last Christmas”、山下達郎「クリスマス・イヴ」、竹内まりあ「すてきな Holliday」が上位に来ているのが目立つ。竹内マリアの曲はケンタッキー・フライドチキンのクリスマスシーズンの CM に使

われているため、学生諸君の印象に残ったものと思われる。フライドチキンでクリスマスを祝うという日本的な特異な習慣が、かなり広く行き渡っているようである。他方、山下達郎の曲が JR 東海のシンデレラ・エクスプレスの CM シリーズで使われたのは、学生諸君の親の世代が若かった頃のはずだが、さすがに名曲としていまも聞き継がれているということなのだろう。

昔から馴染みのクリスマス曲は「ジングルベル」、「きよしこの夜」、「赤鼻のトナカイ」が入るものの、これらはクリスマス曲としては「新参者」であり、商店街などで季節に流されているから耳に残るのであろう。

実際、このアンケートの結果を紹介しながら、改めて学生諸君に「クリスマスキャロル」で知っている曲はないかと尋ねてみたが、そもそも「クリスマスキャロル」という概念すら誰も知らなかった。いわゆる「ミッション系」の中高を卒業した学生もいたはずだし、クリスマスに「聖劇」をやった経験のある者もいたようだが、「キャロリング」などはしなかったのかも知れない。「神の御子は今宵しも」、「まきびと」、「来たれともよ」などはもう普通に知られてはいないのである。

ちなみに、「聖劇」の有り様は、半世紀以上前の筆者の時代と、そんなにちがっていないようであった。



幼稚園の聖劇で東方の三博士をやった石井

4.

次にクリスマスのイメージについて「絵」とキャッチフレーズを書け、という問いには、
次のような興味深い回答が集まった。それぞれに、筆者の解釈を加えて授業で紹介した：

あえて日常を訴える日 = 非日常

12/31までに4000字の課題
27提出、年明けにも3つ
の授業の言葉題が提出
期限ですよ！



クリスマスには **レポート** を！

宗教的意味を問う＝楽しみ騒ぐとき

「イエス・キリストの誕生日を
祝う日」なのに
勘違いしている人でも多い
不届き者には
キリストの愛の裁きをプレゼント!!



クリスマスには **裁き** を！

あえてアルバイト＝休み、愛し合う時

聖なる夜を共に過ごす
カップルを模様に
アルバイトに勤しむ。
誰かが働かなくちゃ
素敵な夜は 成り立たない！
クリスマスには **アルバイト** を！



ことさら買い物＝経済的意味のある祝祭



ことさらインスタ＝承認要求を満たす日



ことさら独り＝恋人たち、友人との日



女子会＝恋人たち、友人たちの日



家族と経済活動の日



宗教的意味を問う＝宗教抜きの楽しみの日



アンケート用紙にあるように、むしろ「反発」、「パロディー」、「カリカチュア」としてクリスマス・イメージを出してもらったので、学生諸君から提出された解答には、面白いようにその裏返しで、学生諸君が抱えているクリスマス・イメージの実相があぶり出されてきた。それは上に挙げたとおり、授業で紹介する際に私になりに解釈と解説を付けておいた。

90年代頃の「クリスマス＝恋人たちのシーズン」という商業戦略の名残というか、沈殿が見られる。これらにどっぷりつかって育った親の代の人間によって現代のポピュラーカルチャーのイメージ作りが行われているので、その影響があるのだろう。

しかし今の世代の学生諸君は、一律に易々とどれか1つの商業戦略にのるほど単純ではないようだ。出口の一向に見えない不況や就職難を目の当たりにして育ち、実際、経済的に楽ではなくなって育った現代の学生諸君は、親の代のように甘い夢に易々と身を任せるわけにはいかないようだ。

しかし、恋人とは限定しないで、友人や家族と特別に楽しい時間を過ごし、少しは食べ物やプレゼントに贅沢をして経済的に貢献し、祝祭らしく少しばかりの非日常で憂さ晴らしをし、ただし少々後ろめたいながら、終局のところ宗教抜きで過ごしたい、という、つつまじやかな願望とイメージが透けて見える。

これらのイメージを形成するのにあたり、彼らは子供時代にどのようなクリスマス体験をしてきたのであろうか。これについても興味深い回答がいくつか得られた。

5.

クリスマスの体験・思い出について、次のような回答が寄せられた。

キリスト教との結びつき

幼稚園がキリスト教系の幼稚園だったので、毎年クリスマスには
キリストの誕生の劇をしていました。マリヤさまの習作やれて大喜びしたのを
覚えています。

幼稚園がキリスト教系のところだったので、イエス・キリストが誕生する話の
劇をやりました。私は生まれた小屋のロバ役だったと思います。
(私はキリスト教徒というわけではありません)

家族だけの楽しい特別の時間

あたしの家はカップラーメンが禁止されていて、クリスマスは
年に1回だけカップラーメンの食べれる特別な日でした。

もう禁止されていませんが、いまだにクリスマスの夜はカップラーメン
とケーキです。

今はもういませんが、祖母や叔母、両親と一緒に家でクリスマスパーティーを
していた思い出があります。我が家ではチキンではなく何故かエリメン和鰯(田
舎から届いたお歳暮?)を食べていたが、実に自分の家族だけのクリスマスという
いわゆるオリジナル感が好きでした。

一生懸命演出してくれる両親

サンタさんに手紙を書いて枕元に置いておきました(英語で)。
そに「サインください」と書いておいたら、次の日の朝、サンタ
さんが英語でメッセージとサインを書いていてくれました。

小学生頃、25日朝起きたら、プレゼントではなく、手紙が置いてあり、
「冷蔵庫の中の牛乳の裏を見よ」と書かれており、そこを見に行ったら、
牛乳パックの裏に紙が貼っており、「はあちゃんがよくかわいすを見よ」と
書かれていて……。宝探しの事として、最終的にプレゼントが
あった。

やがて舞台裏を知る子供

・クリスマスに Wii をもらって、実際に触ったことでも嬉しく
思う一方で、包み紙がバイオのものであったことから正体が分
り、申し訳ない気持ちに。

親の携帯電話で遊んでいたが、両親のプレゼントの準備についての
クリスマス
メールのやり取りを見ている。それまで100%オヤジがいることを信じていたのが
衝撃だった。

家族から離れていく子供たち

・毎年この時期になると彼女とつくると
思っていたが、結局出来ず、男を運と悲しい
夜をおくる。

12/24～25で深夜バイトに入っていた。それまでクリスマスの過ごし方には人それぞれ
だからと割り、よく興味があったが、カップルで訪れた客と働いていた
自分とが対峙せられてはどのような気持ちで何かに落ち込んだ。

これらは次のようにまとめられる：

「家族」と「恋人」の2つのイメージ

サンタ、ツリー、ケーキ、プレゼントという物質的形によって、
「家庭（共同）の幸せ」を作り出していた。

成長と共に、子供は家庭からの自立と自活を求める。

＝自分自身の伴侶を見つけて、自分自身の「家庭（共同）の幸
せ」を物質的に構築しようとする。

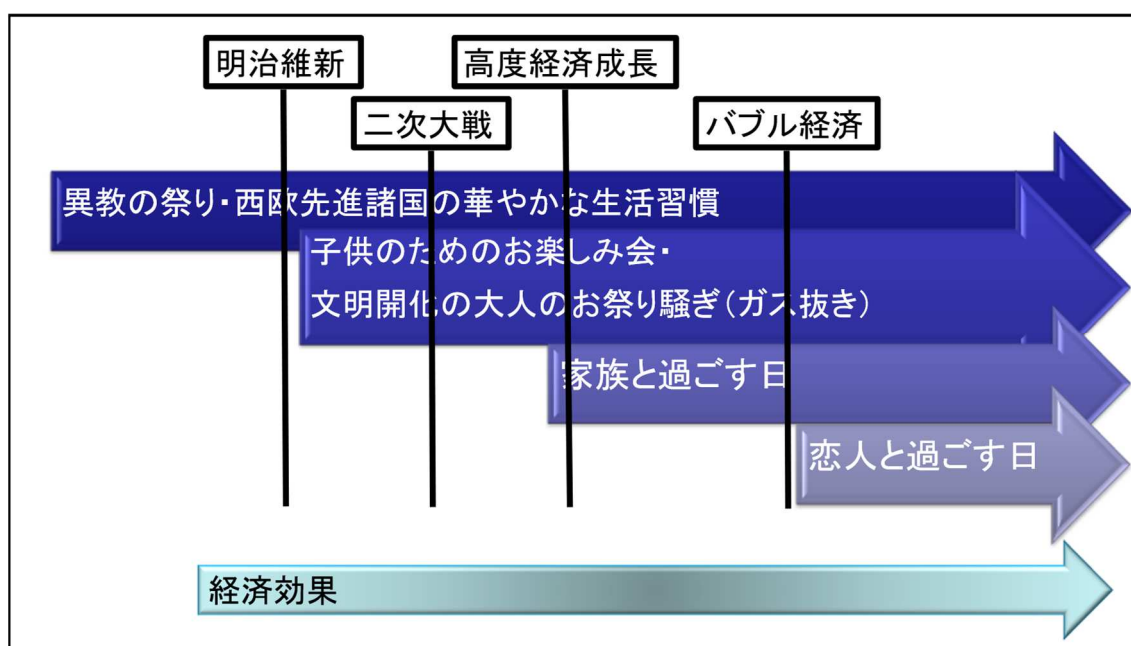
伝統的な正月やお盆よりも、クリスマスこそが現代日本の都市生
活における「家族の幸せ」のためのイベントとなった。

もちろんこれらの省察は、堀井憲一郎『愛と狂瀾のメリークリスマス』（講談社現代新書、2017）に教えられ、まとめられたものである。

田舎の人間関係と「祝祭」から逃れ出て、都会でしがらみのない孤立的な「核家庭」を形成した世代＝高度経済成長を推進した世代が、新しい家族と生活形態に相応しい新しい「祝祭」として熱心に取り組んだのが近代日本のクリスマスであった。西洋的・都会的なクリスマスという新しい「祝祭」が、かれら脱田舎の第1世代に、自分たちの新しい生活様式に相応しいものと思われたことはよく理解できる。

親の代が必死でクリスマスを演出していくが、やがて終わっていく。「核家族」には当然年齢的に「終わり」が来て、子どもたちは自立し、自分自身の「核家族」を作るために家を出て行く。そうすると、残された古巣の「祝祭」も静かに終わっていく。この時点でクリスマスが、「核家族」の靱帯を強める「祝祭」から、新たな「核家族」を作り出すための出会いと結婚へのつながりを作り出す「祝祭」、恋人たちの愛の「祝祭」となる。いや、そのようなものにしようと、商業的に画策されたのだ。

堀井の研究に従って、日本のクリスマスの歴史は次のようにまとめられる：



バブル経済の後に生まれ育ったZ世代の学生諸君のクリスマス・イメージには、このような日本のクリスマスの歴史が見事にたどれる。

しかし「核家族」は、長引く経済的停滞と、ジェンダー平等が進まなかった結果、思いも寄らない「発展」をとげてしまう。従来の「核家族」そのものが維持困難となって減少し、単身世帯が増え、少子高齢化が進む。暗澹たるディストピアが現前した。

新しい「祝祭」を切望し、生き生きと運営する、そのような新しい「家族共同体」がこの

Z世代によって苦しみの果てに作り出された時、日本は再び平和と繁栄を迎えるであろう。